

午後のカーテン ● 武富純一

「ロッキー」を左右の耳に押し込んで拳振り上げ一日始まる
マスキングテープに乗った色として後でゆっくりはがしてやるう
ぷつぷつとゼロカロリーの千の泡 知的障碍の弟の声
でかい犬みたいにじつと居間の隅ひかりを溜める午後のカーテン
捨てられし折鶴蘭の枯鉢の小さき緑に立ちどまりたり
空っぽの車庫の連なる家々に今日もとどまる黒きクラウン
晩春の蛭池はたるがけの北町のフロントガラスのゴビの風たち
真つ直ぐに阪神電車は淀川を越えて父母、弟の町
極太のTのごとくに物干しの紺の稽古着うでを伸ばせり
商店街出る人々に被さりし影上半分たちまちに消ゆ
シャッターに貼らるる閉店挨拶は「ごさいま：」あたりで反り返りたり
おばさんのやさしい餌に寄る群れに少し遅れて野良のシャム猫
かさかさと言のしそうな父母へぼつりぼつりと明日は雨らし
ひげ剃りの跡の濃くなる弟のなかをゆつくりローカル列車
うつうつと悩み育てし歳月の母の背中が捜しものする
鉄棒の鉄のにおいとまいちゃんの「なんでおとうとあほになったん？」
ごみ箱に敷こうと開くレジ袋なかに小さき玉ねぎの皮
いじめられ泣く弟を遠くより見ていただけの兄でありしよ
往復とならずとどまる二、三台深夜の駅の自転車置き場
繰りかえす同じ話にこれからもずっと頷き続けてゆこう

受賞の言葉——武富純一

二〇〇八年に入会し、翌年から毎年の応募を続け、テーマや構成、表現等に悩み続けてきました。昨年はなんとタイトルを書き忘れ、「無題」との選考発表に私がアホさ加減を呪いました。

幸綱先生、選考の先生方、兵庫、京都、インターネット歌会の皆さま、そして伊藤先生はじめ、私に短歌を教えてくださいました。どうもありがとうございます。

それにしても着物姿の桐谷さんとハゲできるだなんて：最高の嬉しい思い出となりました。最後にこれから本賞に応募される方に大事なアドバイスをひとつ。タイトルは絶対に書き忘れぬよう。

